

或る英文學者への直言

——宮崎芳三著『太平洋戦争と英文學者』に寄せて——

和田正美*

日本における歐米の文化や文學の研究者が過ぐる大戦の間に何を考へ、何を言つたのか知りたと思ふことがよくあつた。何も彼等の戦時中の言論に戦後の言論をつきあはせて、そこに見られる矛盾不一致を咎め立てしよう、との魂膽からさう思つたのではない。たしかに彼等の多くが戦後になつてその態度を變へたことは思想、言論の一貫性といふ観点から問題視すべきであらうが、さういふことよりは、歐米の、それも特に當時日本と交戦状態にあつた國々の文化や文學の研究に携はることは研究者に微妙な立場を強ひた筈であり、その立場よりする發言を検證することは人間に關して或は研究の姿に關して何かを啓示するだらうと考へたのである。

最近讀む機會を得た『太平洋戦争と英文學者』は表題が示す通り、私の年來の「問題意識」に觸れるものであり、以下にこの本への批評を試みることにするが、最初に書いてしまふと、これはまことに示唆的な、興味深い本であるといふものの、讀後の印象として私の中に物足りな

さと割切れなさが残つてゐることは否めない。この心持の據つて來る所は拙論の展開が自ら明らかにするであらう。

著者の宮崎芳三氏が主に取上げてゐるのは福原麟太郎、大和資雄、中野好夫、壽岳文章、齋藤勇といった人々であるが、この中では大和資雄に最も多くの頁が割かれてゐるので、それに合せて、先づ最初に、大和がどう扱はれてゐるかを見ることにしたい。

大和資雄は昭和十七年三月に『英文學の話』といふ本を著したのとこである。いふまでもなく昭和十七年三月は太平洋戦争——私はこの戦争を大東亞戦争と呼ぶことにしてゐるがここでは宮崎氏の語法に従つておく——の初期であり、大和は明治三十一年の生れだから、この時の満年齢は四十三四歳であつたらう。このむづかしい時期に刊行された『英文學の話』の「序」の中には、大きい活字で、「屠れ米英われらの敵だ！／分捕れ沙翁もわがものだ！」と印刷されてゐるさうである。そしてこの本は英文學について書いたものであるといふのに、崇神天皇以下、天皇の名が頻繁に出て來る風變りなものであるらしい。「序」につづく「凡例」によれば、「本書は日本的立場から英文學を見」といふ「前人未踏の境地を拓」いたものなのだつた。

自分の著作を「前人未踏」と評することは驚きであるが、この本に對する宮崎氏の辛口の批評は説得的であり、これを讀んでゐない私も、氏の言ふ通りなのだらうと思はせられた。大和が天皇の名を何度も記したことは彼の皇室尊崇の念の深さを表すものではなく、それは年表對照のための目印に過ぎないと宮崎氏は喝破してゐる。たしかにこう考へれば天皇の名が途中で本文から脚注にずり落ち、しかもその後、「ジョージ一世の代、わが中御門天皇の享保四年」を以て姿を消す不思議さは理解出來ようといふものである。宮崎氏によれば、「年表對照という機械的

作業は、誰でも少しやっていけば飽きてしまう」のだが、いくらさうであつても、「年表対照の目印としてであれ、ためらいもなく天皇の名を口にし、くり返して名をよぶうちに飽きてきてしまいにプツンと口になくなる」手軽さは問題だといふ宮崎氏の指摘を私達は大和一人への批判としてではなく受け止めるべきであらう。何故ならここでは明らかに日本人の性格の負の一面が取沙汰されてゐるからである。

實際、大和資雄といふ人は、宮崎氏の文を通して接するだけの私にも、奇妙に日本的な性格の持主に見える。(それだけに私は大和が憎み切れない。)たとへばかういふこともある。

すでに述べた通り、『英文學の話』の「序」には、「屠れ米英われらの敵だ」云々といふ威勢のいい言葉が書きつけてあるが、大和は本文の終りの方でも、イギリスとアメリカの帝國主義的アジア支配をなじつて、それに抗すべく立ち上つた日本の立場の正當性を訴へてゐるといふ。ところが本文のそれ以外の箇所では案外イギリス寄りの記述が多いことを宮崎氏は指摘してゐる。その一例を挙げると、大和はイギリスの「インド蠶食」を非難したかと思ふと、すぐさま、一八五七年のインドの「叛亂」に話を移して、「コオンポアでは英兵五百に英人婦女子五百が印度兵に圍まれて籠城した後、印度軍が休戦を申出たので、うかと信じて撤退する途中、渡船場でだまし討にあつて、四人のほか全部鑿殺された」と記した。この文の中の「だまし討」にしろ、皆殺しを意味する「鑿殺」にしろ、イギリス側に同情する言辭に他ならず、宮崎氏がここに見られる前後撞着に目をつけて、大和は卑怯なやり方が嫌ひであり、血を見ることには耐へられなかつたのだらうと推察してゐることは正しいと思ふ。宮崎氏が大和の「心の地」の一面を、「積極的な元氣のよい心をもつ、傷つきやすさ」と評したことは秀抜な見解である。ここにも日本

的な、餘りに日本的な精神があると言へよう。

そして宮崎氏によれば大和が戦後の昭和二十三年に出版した『英文學史(新版)』は昭和十七年の『英文學の話』の焼直しでしかなく、もとより米英を非難する語句は省かれてゐるが、天皇の名までそのまま出て來るのださうである。これは驚くべきことと言はなければならぬ。昭和十七年と昭和二十三年では狀況が天と地ほどにも違つてゐて、同じ本が著せる筈はないからである。

宮崎氏は結論として大和には特定の立場があるやうに見えて實はなかつた、彼の日本的立場なるものは付焼刃に過ぎない、彼には思想はなかつたのだと決めつけてゐる。大和資雄の無思想。そして彼によく象徴される日本の英文學者の無思想。この『太平洋戦争と英文學者』の力點はそれをあばくことの上に置かれてゐるが、本書から感じられる大きな疑問は他ならぬこのことにかかはつてゐる。それでは著者の宮崎芳三氏にはどんな思想があるのか、この本は讀者にそれを過不足なく傳へてゐるであらうか、と言つた疑問がそれである。

しかしその問題を吟味する前にもう少し宮崎氏の主張の跡をたづねることにしたい。

大和資雄のナショナルリズムを生み出したのは、市川三喜と齋藤勇によつて代表されるアカデミックな英語英文學の研究が日本人としての立場を反映しない無國籍に傾いたことでもあつたらうと宮崎芳三氏は述べてゐる。そこでその齋藤勇であるが、宮崎氏はこの碩學の主著『イギリス文學史』(昭和三十二年版。昭和二年の初版の表題は『思潮を中心とせる英文學史』)を検討して、今度も、大和を解剖することの中で見せた手腕を發揮し——もつとも齋藤論は大和論よりずっと短い——齋藤を

以て自分を見失つた學者だと斷じてゐる。宮崎氏によれば學者の自我は、學問の圍ひの中で勉強にいそむ部分と世間で普通に生活する部分に分けられるが、この二つの折合ひをつけるのは容易なことではなく、それだけにかへつて彼の研究には兩者の緊張關係が表れてゐなければならぬのである。これは妥當な見解と言つてよからう。ところが齋藤の本の何處からもその緊張は感じられない、彼は自分から切り離されてゐる、勤勉なだけだと宮崎氏は論難してゐる。その意味での勤勉さは齋藤だけのもではなく、彼を御手本にした英語教師と英文學者の通弊なのだと宮崎氏が歎く時、これは私の青年時代以來の印象、『あの人は思想と感覺における自己不在を、重箱の隅をつつくやうな研究によつてごまかしてゐるだけだ』といふ印象に一致するやうに感じられて痛快である。宮崎氏は結論として齋藤を「思想以前」と評してゐる。氏にとつては大和資雄も齋藤勇も無思想の徒でしかなかつた。が、ここに問題が生ずる。私が一度は見せながら、再び伏せた問題である。文學の研究者にそれほど「思想」を要請する宮崎氏は果してどんな思想を保持してゐるのか。

そのところがよくわからないのである。深遠な思想といふが如きものことを考へてゐるわけではない。宮崎氏も、思想とは、「自分のしていることを意味づける一定の見方をもつことである」と言つてゐるが、その通りであらう。その「見方」は必ずやその人の生き方に轉化する。しかし英文學者の場合にはその見方、生き方は彼が取組む文學を核にして形成されるより他はない。その正しさは彼が英文學の中からつかみ取つた何等かの精神によつてのみよく保證される。宮崎氏は英文學者であるが、この本からはさういつた趣きを感じられないのだ。暴言に近いことを承知の上で言はせて貰へば、これは英文學者でなくても、日本の英文學研究の動向に通じてゐる人なら書ける本である。

宮崎氏の英文學者批判は犀利であるし、決して的外れではないのだが、右に述べたやうな裏付けを缺いてゐるところから、それが當然備へるべき重量には達してゐないやうに見える。このままでは同業者仲間の思想的不徳をあげて見せたに過ぎないとまでは言へないにしても、その告發を通して、それを超えたところに輝き出て欲しい宮崎氏自身の思想は偲ばれないのである。中野好夫が昭和十七年十月から十八年二月に掛けて發表した論文「直言する」を宮崎氏は高く評價しながらも、一方では「身近な問題を論じるとき、その問題のうしろにそびえるように立ちただかる大状況としての戦争にまで議論が及ぶ、ということがなかったのはなぜだろう」といぶかつてゐるが、視點を少しずらして考へれば宮崎氏にしても似たり寄つたりだといふ感想を禁じ得ない。そもそも宮崎氏は英文學の何に共感し、何に反撥するところから、その思想を、すなはち人間としての生き方を身につけたのであらうか。

前者の「共感」はさつぱりわからないが、後者の「反撥」について言へば、宮崎氏がシェイクスピアに、そして西洋の芝居全體に違和感を覺えると述べてゐることは注目に價するかも知れない。シェイクスピアその他のドラマでは自我と自我がぶつかり合つてゐるが、日本人の世界にはそんなに激しい自己主張はないのだから、西洋の芝居はうそつぽい。宮崎氏は言ふのである。私にして見ればこれは珍妙な議論ではない。シェイクスピアなどの登場人物の自我と私達日本人の自我は單にその表れ方を異にしてゐるだけの話ではないか。さうでなければ……しかしこの際、私の所見はどうでもよいことにおかう。問題はこの反シェイクスピア的英文學觀が論理の域にまで高められてゐるか否かである。この場合の「論理」は「思想」と同じく、固い、いかめしいものでは斷じ

てない。それは人間の自在な生き方に自ら伴ふ何物かである。宮崎氏は大和の「失敗」を目前にして、自分が「イギリスの文學について、『日本の立場』から書くとしたら」「イギリスの文學作品を読んで私が違和感をおぼえるとき、その小さな個人的な違和感を手がかりに、その感じがどこから出てきたのかを考え、その考えをのぼせるだけのぼしてみる」と言ふのだが、さういふ作業を未だ文字化はしてゐないまでも、せめて氏の心中ではそれが完了してゐる、或は進行中であるといふことを感じさせるやうにこの本を書いてくれればよかつたと思ふ。如何に正しいことであつても、掛け聲だけでは困るのである。

身も蓋もないことを書き始めたが、この本の着想はすぐれてゐるのだから、美點は容易に見出だすことが出来る。その中で最大の美點と思はれるものを次に挙げると、「太平洋戦争はわが國の英語教師、英文學者にとつて災難であつた、それも大災難であつた」、しかし、「それはまたとないよい機會、絶好のチャンス」でもあつたのだと宮崎氏が考へる、その考へ方こそそれであると言はなければならぬ。これは重要なことなので宮崎氏の文を引用することにしよう。

この戦争で、わが日本人は、はじめてイギリス、アメリカと眞正面から向き合つたのである——友としてではなく戦うべき敵として、しかも油断ならぬ強大な敵として、である。太平洋戦争は、その戦争を好んだ軍人からそれを嫌つた厭戦家にいたるまで、すべての日本人に日本人としての自覺を強いた。(中略)戦時下、わが英文學者が、イギリス、アメリカに敵として向き合ねばならなくなつたとき、彼らは、相手を他者として眞正面に置いてそれを見すえるこ

とのできる絶好のチャンスに恵まれたのである。

彼ら「日本の英文學者」から見れば、日本はまずしく見すばらしく、文學もイギリスの方がずっとホンモノで、そのよき理解者であると自認する彼らにとって日本の文學よりもイギリス文學の方が身近に感じられもしただろう。その幻想のような空想にはおかまいなしに、戦争は彼らに自分は何者かを自覺させた。

私の考えでは、なれあいのような主客とけ合つた氣分に酔うのではなく、相手を他者として明確に對象化することが、學問研究のABCである。否が應でもそうせざるをえない狀況がつくられたという意味で、わが英文學者にとって、戦争は好機であつた。

ここに書いてあることに私は全く賛成である。これは日本の英文學者の、といふよりはもつと廣く西洋學者の口から今まで聞くべくして聞けなかつた言葉であり、彼等の多くがかういふ自覺に達し得なかつたやうに見えることはまことに不思議と言はなければならぬ。これほどの好機をむざむざと取逃しておきながら、戦後になつて、被害者の態度だけを執らうとする連中の消極性、退嬰性を指彈する宮崎氏の姿勢はたしかに美しい。

しかしこの場合にも疑問は起る。宮崎氏自身はどうなのだらうと思はないではゐられない。この本の奥付けによれば宮崎氏は大正十四年の生れだから、戦時中は學生だつたのであらう。當時すでに英文學者として一家をなしてゐた人々と宮崎氏を同列に置いて論じるわけに行かないことは事實である。それは認めるが、宮崎氏は戦後の社會で、「あの戦争

は好機だった」といふ意識のかけらすら持たない英文學者にいやといふほど接した筈であり、さういふ時には、「自分が彼等だつたら……」と考へたに相違ない。その點、宮崎氏とて、象徴的には、戦争の中をくぐり抜けた英文學者の一人であつたと言へよう。そもそも戦時中の英文學者に身を擬することは戦後生れの學者にだつてしようと思へば出来ることである。とすれば宮崎氏の文章の中には戦争と英文學の「緊張關係」——この語はすでに述べた齋藤勇の項で宮崎氏自身が學問と世間の對比といふ文脈において使つてゐる——よりする、氏に固有の思想、感覺、生き方が見え隠れしてゐなければなるまいが、それを發見することは殘念ながら出来なかつた。宮崎氏は事柄を外側から見えてゐる。戦時中の體驗を一つの苦勞話にしてしまつた或る英文學者について、宮崎氏は、「せつかく戦争をしたのに、せつかくあれほどひどい目にあつたのもつたのではないか」と述べてゐるが、この名言を前にして私は考へこまないではゐられない。



壽岳文章は昭和十八年二月執筆の短文の中に、「生きてゆく上にひしひしとつながつてくるのは、もう一昔以上も前に始まり、年と共に強まる西歐中世への愛です」と記したのであるといふ。宮崎氏はこの日本への愛想づかしの意味にも取れる反時代的發言に反應して、「私だつたらどうするだろう」と自問してゐる。

私なら、こういう日本への絶縁状のようなものは書かないだろう。書けない、書く勇氣、力、そういうものが私にはない、ということもある。それが九十パーセントの理由だが、しかしのこりの十パーセントのところ、書こうとしない私の意志がある。むしろ、書いて

てはいけない、そういうものを書いて縁を切つてはダメだ、と思ふ心が私にある。日和見主義と言われても、關係はつないだままで自分の思いを伝える工夫をこらす、という方を私はえらぶ。

壽岳の文章の迫力に壓倒されながらも、それにささやかな抵抗を試みた一節である。かういふ場合には壽岳のそのやうな態度に筆者が基本的には賛成なのか反對なのか自問はれるであらう。宮崎氏の言ひ條はそのところが曖昧であるが、とはいへ、誰か或る人の立場に、賛成反對を一先づ措いて身を置くといふやり方は悪くない。

問題は「のこりの十パーセント」である。讀者として知りたいのはその十パーセントから何が出て来るのかといふことであり、戦争といふ假借のない現實に直面した英文學者がそこに何を賭けたのかといふことである。「關係はつないだままで自分の思いを伝える工夫をこらす」と言ふだけでは餘りに抽象的であらう。繰返し述べると宮崎氏は、戦時中の英文學者であることを暫定的にであれ引受けてもよいのである。

この本は構成から見ても奇妙なところがある。昭和十八年の一月と二月に發表された論文「アメリカ心について」は、宮崎氏の言葉を借りれば、「苦境に追いこまれたひとりの英文學者が（中略）自分を救おうとしたまじめな試みであつた」が、その内容はアメリカニズムを四つに分けて猛烈にその悪口を言つたものであり、いくら戦時中でも、こんなものを讀んで感心するのは盲目的國粹主義者だけだらうと思はせられるやうな代物である。宮崎氏はこの駄論文の中では自分の考へと他人の考へがごちやませにされてゐることを指摘した上で、筆者がこれを書いたのは、「（國から世間から）自分が危険人物と見られはすまいか」との被害者意識が嵩じた結果であらうと筆者の心理に對して理解のあるところを

見せてゐる。が、この論文への見方はそれでいいとしても、宮崎氏は「アメリカ心について」の筆者名を最後まで伏せたままなのである。これはどうしたことであらうか。

同じ例はもう一つ挙げられる。昭和二十五年に出版された『小説の技巧——英國小説の發展』の「あとがき」の中で著者は空襲と疎開の苦しみを振り返り、それが終つて「再び恩師のもとで研究を続けられることの幸せをしみじみと感じた」と書いてゐるさうである。このやうに戦争を「思想の問題」として受け止めようとはしない態度に宮崎氏が批判的なのは氏にして見れば當然であり、私も氏の批判には全面的に同調したいと思ふが、氏はここでもこの研究書の著者名を明かさないのである。何か事情があつて名は言へないといふのなら、書名、論文名もぼかしておくべきであらう。

英文學者の無思想を剔抉するのはよい。それは英文學研究の在り方のみならず、日本人の精神生活にも何かを寄與しようといふものである。しかし肝腎の論者の「思想」が不分明なのでは何にもならないではないか。宮崎氏はこの本を序論、或は少なくとも前篇とする新しい本を書いて、その中で、英文學の研究をライフワークとするところから身につけた氏自身の思想を十全に展開すべきである。この場合の「思想」が意味するものについてはすでに記した。宮崎氏がそれをするまで、私は、言葉の眞の意味における主體性を缺いた『太平洋戦争と英文學者』を評價しないことにしておく。

註

原本は次の通りです。

宮崎芳三『太平洋戦争と英文學者』研究社出版株式會社 一九九九年